

哲学の現実態序説

—『饗宴』研究—（その二十九）

伊集院 利 明

第六章 夢中説夢（続き）

26 第六章後半部中間決算

本章後半部の中間決算として、ここまでの成果をまとめ、いくつかの補足的説明、考察を加え、ここからの論のための課題を示し、方向付けを行っておきたい。

統持、およびその蒸発結晶化の対成立から、過ちの転としての根づきを追求してきた。そこでひらかれるような能動的かつ、受動的既定的動性が根づきの典型的運動として示され、このひらきにおいて、気分の肯定性、積極性と相まって、私は世界に生きることを実感する。これは、私が世界に生かされているという実感であり、かつ、この生かされているということこそが、私が能動的に生きていることであるとも言える。能動性と受動性、肯定性と否定性の種々の交叉が統持形成を支えていることが、世界の感得の深みをもたらしていくわけである。

転における肯定性の気分が論述において強調されたが、一方で対成立の否定的側面自体が転につながるという面も明らかにされてきた。蒸発の現象が視野に収められることにより、対成立構造が限定性の意識を高め、能動性と限定性との連動を先鋭化させること、巡回性、拒まれの感

得自体が具体的なものとのかわりの強さに連なり得ること、蒸発感における不定性が全体性の問題化にかかわることなどが、指摘されてきた。生の全体はこうした各種の軋轢、否定性、不定性ととも問題化され顕現する、他性をおびたものである。他全性性の提起はここまでの間で大分具体化されたことになる。そして生への私の立ち向かいの力、肯定性の気分も実態的に否定性を通して得られるもの、つまり、生に立ち向かいきれない気分と隣り合わせに、かつ、その構造を基盤に成り立つものである以上、私は言わば否定的身体を生きるのであり、そうした否定的身体の力こそが私の力であり、ここには一種の幽霊性が付きまとうことになる。逆に言えば、否定性が肯定性の源となることが示されたのであり、ここまでの考察で統持において生の、限定性、問題性、とらえ難さが、生の肯定感へと連動する「転」が、かなりの程度主張されたことになる。

ここまでの考察で浮かび上がってきたことで、ここでもっと整理し直しておきたいことが三点ほどある（三点目は二点目の延長とも言える）。これらはいずれも単なる補足ではなく、かなりの重要性をもつものである。

第一点。第16節において、鵑外型のおそれを扱ったところにおいて、人生を見極めきれずに死ぬことのおその重要性がそれなりに説得力を持つものではあるが場合によっては抽象的な認識論的懐疑に類したものに堕してしまう危険性を持つこと、具体的場面での何らかの実効化が必要であることを論じた。まさにそうした実効化の道筋がここまでの考察によって与えられたことになり、そしてこれはかなりの重要性を持つと言える。自分の生に対する見方が、限界づけられたものであることが、巡回感において核心を拒まれる感覚として、世界におけるものとの具体的な関係のうちに身体感覚を持った動性の中で体験される。限界感と連動

した巡回感は、世界の見方の深化に関して自分の生において達成できることの限界をも突きつける。こうした見方は当然人間が死ぬものであるという（他者の死の「経験」にもとづく）一般的洞察を基盤とするものである以上、抽象性が付きまとうが、ものとのかわり、根づきの動性において具体化されることで先鋭化を得る。鵠外型のおそれの重みはこうした展開可能性の提示によって説得力をもつことになる。ここにあるのは、自分の目が根本的な形で限定されていることの実感である⁽¹⁾。

- - この重みは無視できない。

第二点として、転を支える現象として、逆転と認知の合体と呼び得るものの実相が浮かび上がっていることがある。この言い方はやや奇異の感を与えるかもしれない。というのも、生を俯瞰する目が現実の場に置かれるという構造から生の現場での予測の立たなさ、思い通りにならなさが問題になるという形での両軸の関係こそが、第六章の冒頭の段階から提起されてきたはずだったと思われようからである。当初から合体が主題的に考察されてきたことは確かである。しかしこの段階で浮かび上がってきたのは、原理的構造連関以上の、より実態的、実践的な連関である。過ちにおいて垂直軸のものが平面におろされて齟齬を生んだのに対し、転の考察で明らかになっているのは軌轢自体が垂直軸を深みとして切り開いていくことである。ここでは単なる構造の第三者的考察ではなく、水平面の齟齬の感得自体が、垂直軸の深化をもたらす。ここまで明らかにしてきたことは、齟齬の感得、そしてそれを見る目によって感得の適合とともに結び結ぶ相手との関係にさらにまたずれがはらまれることの感得、こうした累乗化される形での世界平面における齟齬、ずれが、世界を見る目の深化になるということである。平面上の軌轢によって視はこの世界についての思考としての具体性を増幅させ、私の生自体に全体性を見る目としての先鋭化がもたらされることになる。統持

の形成はこうした次元の展開に対して具体的に大きくかわる。そこでは全体を見る目が一つのものとかかわりと感得の適合性において、世界への根づきにおいてありありとしたものになる。こうした具体性は、垂直軸の次元と水平軸との齟齬との関係を強化し、累乗化の方向性への推進力を強化し、累乗化を世界へのかかわりにおける限界性の具体的鋭さとして高めていく。これにより、ここまで、世界の根づき、限定性、巡回感について考察してきたことの意義がより明確になったと言えると思われる。まさに齟齬が先鋭化し限定がつきつけられる生に向かうことが、世界のうちに全体性を感得する目の生成、深化となるからである。既定性における世界の全体性が他的に「与えられている」ことの目によって私は世界との具体的なかわりを深め、根づきを深める。

第三点として、ここまでの考察が、我々が時おりいただく、苦しみの中にこそ生の本来の姿があるという実感の意義（ないしは正当性）の解明にすでにならなっていることが挙げられる。自分の生を真剣に受け止めようとする、能動的に態度を取ることで自分が様々な齟齬を生むことが析出され、その上で、転の考察によりそうした運動の先鋭化の中に生の深みの感得があることが示された。こうした事情は、苦しみがなければ生とは言えないという実感、また、抵抗感のうちに生きていることの実感が高まるという感覚のよって立つ基盤を明らかにするものであり、これはさらに様々な軋轢の深みの感得への展開に説得力を与える。ついでに述べるならば、第五章第12節で美の荒真性として、自分の身体、心の、具体的なものとかかわりにおける傷つきが美においてその本質の一面をなすことを提起したが、本章の考察は明示的には美を主題的に扱っていないものの、傷つき、齟齬と生の真相との連動の解明によりかなりの基礎付けを与えられたと言えることも指摘していきたい。――なお、さらについてながら、傷つき等の感覚があるためには、ある程度私とい

うものが（その時々ではあっても）安定した形で与えられていなければならないということを指摘しておきたい。変化を続けるだけの流水のようなものが傷つくということはない。この点については第22節で考察したように立ち止りの契機が齟齬の感得と世界性の感得の深化にとって決定的な役割を果たすということ、そしてさらに、能動性の私の能動性としての働きの持つ積極的意義が大きくかわるものである。

以上の三点について、今後の課題を整理する前に、統持についての前節までの考察に対して挙げられ得る一つの重大な疑念について触れ、それに対する釈明を述べておきたい。それは、出会いの考察、人間どうしの関係の考察であるにも関わらず、愛への言及と追及が全く欠落しているのではないかという疑念である。ここまでの論が安定した関係よりは出会いの契機、側面に焦点をあててきているとは言っても、出会い自体の中に各種の調整、感慨の展開などの、様々な運動性があることが議論の機軸の一つとされた以上、愛的な関係への言及、追及がないことは、関係の相互性を無視するもので大きな欠陥であるように見える。この論述はまるで相手を自分にとってのものとしてとらえる観点からのみなされているかのごとくであり、成熟した大人どうしの相互的關係、出会いの考察であると言うには程遠いのではなからうか。

この、かなり正当な疑念に見えるものに対しての本格的な形での釈明は先延ばしにする。というのは、愛の問題は次章の考察のうちの中心的テーマとなるものであり、その段階でまとまった論及を与えることが様々な不都合（冗長さ、煩雑さ等を含めて）をさけるために必要だからである。その段階で議論の循環を避けた論述が適切に与えられねばならない。しかしここである程度の暫定的釈明を与えておくことができる。それは、ここまでの論述でこうした関係における愛のあり方を解明するための下図が既に与えられているということである。というのも、感得

の適合が論じられることにおいて、すでに相手を自分にとって重要なものとして感得することが浮かび上がってきており、しかも相手の相手としての独立性、私にとらえきれない独自性が各種の齟齬の基盤となることも論究されてきている。これらに、論究はされていないものの、一見して自明に見える（prima facie）項目、つまり、感得においては感情情動がその中核的構成要因になること、感情のあり方が我々の価値観に、そして価値観に基づく反応に直接的にかかわること、相手の独立性とは個人としての独立性、価値観をもった人格としての独立性がその中核となること、これらをあわせれば、統持的関係の中核に愛が含まれることはほぼ直に帰結することになる。本論第七章の考察は、愛が単なる感情であることを否定することになるが、それでも、相手の独立した存在の価値と相手の重視する価値の実現いかに対して一定の情動的パターンを私が持つということが愛にとって極めて核心的である⁽²⁾ことは明らかに正しと思われる。そして、いま述べたようにまさにそうした関係が統持の形成において成立していることがすでに下描きされているのである。もちろんここまで描ききれていない点に愛を愛とするうえでの重要性があること、さらに関係の安定性の点で愛が果たす役割に重要性があることはたしかであり、そういった点を追及していくことは第七章の考察の仕事となる。それでも以上の説明がとりあえずの釈明として十分なものであると主張できることは明らかなように思える。――その上で、いくつかの予告的断り書きを加えておきたい。まず、本論は統持を過ちの転、根づきにとつての先鋭化された姿としてとらえるが、これは本論が統持との関係を愛の理想的姿として描くことを意味していない。むしろ第七章の論は、愛に含まれる、統持の先鋭性と言わば逆向きの方向に働く力を重視することになる。第二に、先にも簡単にふれたが、私は愛において感情が中核的役割を果たすと考えるものの、同時に感情を一定

に制御する非感情的力、要因をもってはじめて愛は愛として成り立つと主張する。そして次節からの出会いについての論述はこの点についての一つの下描きを与えることになる。第三に、先ほど疑念として整理したもののうちの、大人の関係が描けていないではないかということにまつわること一言触れておきたい。成熟した大人の関係が愛を考える上で重要であることは間違いがない。しかし本論（第七章の論）は、成熟した大人同士の（あるいは大人の側からの子供に対する）安定した関係を愛の典型としてとらえることに傾きすぎた最近の学界の論調に対して批判的スタンスをとり、若年者の異性愛的恋愛、恋の形態を注視せねば愛の本質はとらえきれないことを論じていく⁽³⁾。

愛についての話を以上として、課題をとりまとめておく。

統持形成構造から過ちの転を解明したここまでの論には、第21節はじめて問題として整理したもののうちの四（出会いの重要性）など⁽⁴⁾にまだ十分な解答が与えられていないということ以外に、明らかに二つの問題があるように思える。一つには、過ちの現象を広範で一般的なものとして主張したにもかかわらず、その転化が主張されるにあたって統持という一つの事象に即した形でしか論述がなされていないことが挙げられる。これは転化をあまりにも特殊なものにしてしまうものに映る。そして、こうした一般性への疑念は、全体性への疑念にも連動するように思える。統持が出会い自体という生全体に関わるものの結晶化ではあっても、一人の人間の生は多様な局面を持つものであり、統持との関係はそこに全体が反映されているとしてもそれでもやはり一つの局面であるという側面を同時にあわせもつように思えるからである。統持にこうした点でどのような一般性があるのか、転化が諸局面にまたがり得る一般性をもったものなのかはさらに追及されねばならない。第二には、統持の積極性、肯定性の威力と安定性に関する疑念である。その力能性につ

いては、先に幽霊性として述べたことは、それについての疑念を高めてしまったであろう。過ちは生に対する向き合いきれなさをその眼目としていた。ここまでの根付きの考察がそれに対する一定の答えとなってい
ても、生への向き合いの「やる気」の実質についての考究はまださらに
必要に思える。そしてそれ以上に何と言っても重要なのが、肯定感の変
遷の可能性の問題である。肯定感が累乗性への展開可能性を持つにせよ、
それがこの世界における具体的なかわりによるものである以上、一時
性の可能性を強く持つことは否定できない。これまでの論によっては肯
定感が崩れて否定感へと転落する可能性の問題性についてはリップサー
ビス以上の十分な目配りがされているとは言えないという不満が残った
かもしれない。- - ここからの論の展開予定は次のとおりである。まず、
残されていた、出会いの重要性についての疑念に対する暫定的な解答(釈
明)を与えながら、上の第一の問題にある一方向からの解答を与える(第
27、28節)。より詳しく言うと、統持が通常の出会いとの間にある種の
連続性、連動性をもちながら生の幅広い局面に位置づけられる一般性を
持つことを論じる(もっとも、通常の出会いにも統持と連続性をもつよ
うな要因が多々あるということ自体は、少し想像してみるだけでもわか
ることだが)。それから第二の問題のうちの変遷、転落の可能性の問題
を統持の小文字性の問題として考察しながら、第一の問題についても別
の角度からの説明を与え上の統持の一般性についての主張をさらに裏付
ける(第29～30節)。その上で、それらの成果から、上の二つの問題に
ついてのより明確な応えを整理し直し、転にまつわる諸経験に瞥見を加
えたうえで、統持と、過ちの転化を世界の中における一種の運動性とし
てとらえる見地から最終的な取りまとめを行うこととする。

27 出会いの重要性の問題について

第27、28節では、第21節のはじめに提起した六つの問題のうちの四（出会いに重要性があると言えるのか、言えなければ統持の重要性も主張できないのではないか）の解明を核として論を展開するが、四についての解答は（またしてもだが）やや釈明的な性格のものとなる。むしろこの二節では出会いと価値との関係、出会い一般と統持との関係の考察を通じて、ものとのかかわりの能作性の展開の幅濫性と生の展開の世界性の重みをより詳しく明るみに出しながら、統持の一般性を、統持が他の出会いとの間にもつ連続性、連動性、そしてそれにより生の大きな局面においてもつこととなる位置づけの観点から明らかにしていく。なお、先にも述べたようにこの二節の論は、愛について直接的な言及はしないものの第七章での愛を主題的に扱う考察のある種の下描きとしての性格を併せ持つことを断わっておきたい。

第21節冒頭で第四の問題を、たまたま出会われてくるものを大切にすることは非理性的ではないか、我々は出会いの重要性というものに対してはむしろ警戒的であるべきではないか、という形で整理したが、この限りでは実際には学界の情勢に従う上では、この問題はとりあえずスキップしておいてかまわないものと言える。partiality 問題の扱いは学界で一定の活況を呈し、partial な価値があるということ（つまり、一定の偶然性とともに関係がもたれてくるもの等に重要性があること）を認めることが大卒の方向としてある。もちろんこれは結論が出ていると言うには程遠い。二人が溺れている場合に自分の妻を優先的に救出することの事例や、M. Stocker の「スミスの見舞い」の事例がきわめて頻繁に言及される割にはそれらがどのような含意をどれだけ持っているかについて十分解明されているとは言えないことも、partial な価値の成

否についての合意自体が十分形成されているとすら言えないことも、周知のとおりである。それでもいま述べたような事例が partial な価値の存在を示すことに一見したところかなりの説得力があること、そして現在の学界の状況からすればとりあえずそうした価値があることを前提に話を進めることは妥当と言うべきである⁽⁵⁾。

ここで先送りするのは partiality 問題の全容だけではなくむしろ価値のあり方そのものについての考察である。第五章において有価と価値との連関を考察した（第17節）さい、この個別的な私の生が私自身に気遣われているということに根源的な（少なくとも一つの）価値があることを提起した。第七、八章においてこれが価値の一つの根というよりもまさに根なのだということを論じていく。個別的な価値である partial な価値の問題は、そこでは価値の問題全般の中核に位置づけられることになる。こうしたことの解明は極めて大きな仕事であり本章の射程を大きく踏み出す。本節と次節はむしろ partial な価値の存在をある程度前提したうえで、私の営為とものとのかわりが個別的な価値にいかなる形で連動するかを示し、その中に統持を位置づけ、過ちの転化について当面問題になっていることに一定の解明を与えることをもくろむ。本節でまず私が特定のものを大切にしているということと私の価値との関係について簡単に一つの方向から説明を与えたうえで、出会いの重要性と私のものへのかわりとの関係を解明し、次節でそうした関係の中に統持がいかに位置づけられまた一般性を持つかを明らかにしていく。

まず、私が特定のものを大切にしているということと私の価値との関係について、私が何かを大切にしているということが全くないとした場合に、私自身の価値というものは考えられるであろうか、あるいはあり得るであろうか。後者（あり得るか）の解明を第七章以降に送り、前者（考え得るか）についてここで簡単に考え得ないことを述べておきたい。

私はもともと何かが大切に何かが大切ではないという世界のうちに置かれている。そのようなものとして私は自分を見出す。世界は私に価値的に平坦なものとしてではなく凹凸をもったものとしてあらわれる。大切なものとそうでないものの区別のない形で見える力を、遠近のない地図を作る力のように人間は持つが、そのように見えるのはそのように見ようとすることによってである。私にとって私が大切というときの私とはこのような世界での個性を持った私である。第五章で自分の生をふりかえるということが自己の個性を実感する最も典型的なあり方であることに言及した。自分にとって大切であるところの自分は、何かをやってきた、ないしはやっている、私、何かあるいはだれかに関わってきた（いる）私である。ただ物理的特徴や心理的特徴なりだけの点から特定されるだけの個体からはすでに価値的なものは抜け落ちている。何かが出てくること、凹凸があること、こうしたことを除いては私にとっての私の大切さということも考えられない。

このことを基盤にして、世界の凹凸と私のあり方との関係の考察に向かいたい。世界の原初的な凹凸といったものは、それ自体ではまさに原初的なものにすぎず、私の能動のかかわりがあって価値、あるいは価値と私のかかわり⁽⁶⁾と言えるようなものがはじめて成り立つと言えることを明らかにしたい。もっと言えば、出会いにおいて私の大切さへの態度とりがある程度でもあることによって、そしてそこにその関係がある程度でも具体的に感得されることによって、出会うものの大切さのはじめてそれとして感得できるということである。（そして、これを明らかにすることが、通常の出会いと統持とのある種の連続性を明らかにすることにもなっていく。）

子供にとって親や近所のみよちゃんが大切であるということと、大人にとっての大切さとは、連続性はあってもやはり区別されねばならない。

子供にとっての大切さは始原的なものにすぎない。そこでは大切なものの大切さがそれとして了解感得されているとは言えない。本来的に何かが大切と言えるためには、自分と大切なもの、大切なこととの連関はある程度理解されていなければならない。これをもっと別の角度から補強すると、まず、価値という言葉の中にすでに合理性の概念が含まれていると言えよう。何らかの形で理解され体系的に位置づけられてはじめて価値は価値としてとらえられたことになる（とらえられなくとも価値が対象側に存在してはいると言えるかどうかは措くとして）ことは明らかに思える。この理解可能性は正当化可能性とも連続する。さらに自分との関係づけといっても単に自分のその時々欲求と関係づけるだけでは（二階のものであっても）「価値」というには不十分である。ある程度でも自分の生を全体としてとらえ、生というものをそれとしてとらえるような態度がなければならない⁽⁷⁾。

このように原初的な自然の凹凸だけではまだ本来の、そして大人にとっての世界の凹凸とは言えないことが理解される。出会いについても、その意義というのは出会いによって近さ遠さができるということではなく、むしろ出会いのもたらす原初的な均一性の崩れに対して、態度がとられそれによって世界の（本来の）凹凸が生まれることにあるわけである。（もちろん「均一性のくずれ」という言い方は比喩的である。世界がもともとは均質のものであるという立場に本論は立っていない。）

こうした本来的な凹凸の生成の実態をさらに明らかにするために、態度とりにおいてももの感得と自己感との関係がいかに変様するかをいくつかの局面からより詳しく見ておきたい。それによってこの論点は一層の裏付けを得るが、同時に出会いの現象における統持の位置づけをはかるための道も開けることになる。

まず、生を生きることの肯定感は、相手と生きることに於いて相手と

自分の感得との適合のうちに感じられる（統持の場合は問題化の相との相手の感得との関係が問題である）。さらに言えば、相手の与える感得、あるいはもたらされる快感の側から私の肯定感が生の全体のそれへと発展させられていく形で、生きること自体の肯定感が形成されてき得る。生の肯定感は（ただ生きるということ自体が善であると感じられるほどに）様々な微妙な形においてきわめて多様な展開性を持ち得るものである以上、適合の仕方も多くの様態の下に可能である。こうした微妙で多様な適合の様々な展開相の中で、生全体の肯定感と関係づけられてはじめてものはその重みを獲得していく。こうした展開性ぬきにももの価値、重みは感得されない。

このような関係性を持つ出会いにふくまれている動的性格も重要である。統持についてこの点はすでに確認したが、通常の出会っても（言うまでもなく）ものとのとは衝突するようなものではなく、動的変化のうちにある。統持的なものでなくとも人間は一定の付き合いを必要としてお互いの適合の調整は必要になる。趣味の付き合いのようなものでさえも、調整を続けていくかどうかのある種の決断ないしはそのより無意識的な形態のものを要するが、それは何らかの自分の生活についてそれがある程度全体的に視野に収めることなしには不可能である。こうした中で私の生が作られていく。私の生への態度とりにおいて私の世界はそれとして成立してその中に様々のものごとは位置づけられる。

さらに、私が相手に態度をとっていかうとする能動性は、相手に引きつけられてのもので、相手に引き出されている。多くの場合においてひかれていくことと自分が向かっていることとは混淆してとらえられるかたちで実感される。ものの中に自分の能作が重ね合わせられるのだ。これは世界（のもの）と自分との関係の積極的なとり結びたり得る。統持の場合に限らず私は相手自身のうちに自分が生と関わる能作を実感す

る。世界の凹凸の中にすでに私の生（全体に関わる）の能作性はおりこめられている。世界へと向かう能作の彩りとともにはじめて世界の中のものの重みは成立する。

もう一つ重要なことは、私があるもの、他者の中へと飛び込むことが必要だということである。私は少なくともその都度ある程度限定されたものにつき合う。我々は具体的なもの、事象へといつも自己を限定してそこに生きるべく飛び込んでいる。大人になるとは自己を限定することだ。だから、飛び込みの実感は自分の生を大きく決めるような相手との関係以外においても微小な形で生にちりばめられている。その意味では様々な程度と形態や部分的ないしは全体的局面において世界は一つのもののあらわれであり得る。そのため私が自分の個別性を最も実感するのも私が一つのものへと態度を取り飛び込むことにおいてである。自分の生の限定は誘われてのものでありながら、かつ、自分からのものである。私はこうした自分の能動的運動とその身体感覚の中において、自分の生きること全体の重みが局所的にはあれ特定のものにうつし出されていることを見てとる。ものの重み、世界の凹凸、私の生の重み、私の自己限定の運動性は、こうした形の連動性において生起する。こうした事態の根本をなしているのは、生きるとはある特定の生き方をするのであり、一方でどんな相手との関係においてもそのことの感得と相手の感得との何らかの対応や適応不適応は起きざるを得ないということである。（それが明示的な問題化の相になっていることを統持の形成は要求する。これはあらかじめのものでなければならない。統持的なものによって形成されてはじめて能作が起こる場合でも、能作が、立ち止りの相を機縁として、あらためてものに立ち向かう契機があるということが必要である。）

自己のあり方との関係の何らかの感得と態度の取り直しにおいて出会

いは出会いとなることが、以上から明らかになった。第一次的自然的所与は、ここにおいて第二次的自然となり、世界の凹凸が世界の本来的な相として現出する。感得の適合と調整、自己の生が局面的ではあってもある程度の全体性を視野に収めてものと関連付けられること、自身からの自己限定の能動性とそれとの関連付け、こうした要因が出会われてくるものの重要性の現象を支えている（出会いは言わばもともと重要になる資質をもっているが、同時に我々の営為によって重要になるという二面性をもつ）。 - - こうした要因に前節までで見てきた統持の生成の事情にかなり近いものがあることは明らかに思われる。本節の考察のいくつかの局面で（括弧入れした形で）相違点を示してきたが、それでも、相違点をふりかえてみるだけでも逆に、運動性、生の全体性との関係などの点での親近性の存在は否定しがたく思えるし、また、自覚、主題化の有無等が程度問題であることを考えれば、その感は一層強くなる。この関係を次節で少し別の角度から、さらに追及し、相違点とともに明らかにしていきたい。

28 統持と出会い

統持と通常の出会いとの類似性と差異の問題についての回答をこの節の後半に先送りして、まず次の提起を基礎づけることから始めたい。それは第27節でとりあげた出会いの重要性の問題が、出会いに重要性がなければ統持の重要性があり得ないというだけではなく、統持そのものもあり得ないのではないか、というものだったのに対して、それに言わば一種の逆転を施すものである。統持のようなものがあり得るのでなければ、出会いの重要性もあり得ない。この主張を基礎づけたい。

この主張の論拠は手短にまとめると次のようなものである。 - - 前節で明らかにした世界の凹凸と出えられるものの価値の「生成」は、様々

な私の運動、調整や様々な感得の適合の成立を前提としていたものである。一方で前節で述べたように、生の肯定感は極めて微妙で多様である。これが様々な出会いの重要性を支える一角であったのだが、これはまた様々な運動性ともとの、自身の生や世界の重要性の感得とも（の重要性）の感得との適合が様々な多様な形であり得ることと、その可能性自体の感得を指示するものである。統持がこうした適合の中の精妙でまた先鋭化された運動性の中に起こる独特な適合を活用して生成するものである以上、いま述べたような各種の多様な適合の可能性が開かれる場、そしてそのこと自体の感得の可能性が存する場に置かれているのでなければならない。そして、出会いの重みとは、各種の適合性、調整等の運動性、主体性、（いざなわれながらの）能動性において出会われてくる場にあることにおいてはじめて作動するものである以上、出会うということ自体の重要性が問題になる場、その重要性自体への着目の成立の可能性が開かれている場が成立していることが不可欠である。かくして、統持があり得る場が成立していることこそが、出会われるものの重み、価値の生成には不可欠であることになる。

これをさらにいくつかの角度から補足、敷衍し、統持が成立し得る場が必要であることと同時に、それが、その必要性自体への視が誘われる場であることも明らかにしていきたい。

出会われるものの重要さの理解、感得は、ここまで描いてきた生成、運動性においてなされる。こうした感得とそれとともに世界の中で生きることが一般原則の考察とその適応としての生というような形をとることができず、私が生きる中で、現実に出会う中で、そうした感得をしていかなければ、それは実効化されない。この実効化は、様々な感得の適合の可能性が開かれる場でなされる。重要なことの実現とその感得の実現が様々な形でこの世界の中のものとしておこり得ることが前提とされ

ていることが必要になる。出会うということ自体の重要性をもふくめた様々なことの感得と、様々な実行の世界内での実現可能性、そして様々な問題をうけとめそれに対して生きていくこと自体の実行可能性、世界内性の感得こそが、価値の感得の成立にとって不可欠である。さらには出会いということがそれとして私のうちに位置づけられるためには、私の側でそれが世界に生きるものとしての生における出会いであることが感得されている必要があり、ここには出会うこと自体が問題であることに注視が向かうことの可能性が萌芽的にはあれ含まれることになる。出会うということ自体が着目され、それ自体についての具体的な感得をともなった世界内実行可能性がひらかれる場があることが、価値の生成にとって必要なのである。

先に自分の運動、調整等自体が出会うこと自体の重要さの着目に結びつき得ることを述べたが、これをもっと掘り下げよう。各種の調整は自身の生自体の重要性を局面的にはあれ視野に収めることにおいてなされる。出会うということ自体が根本的に私の生を決めるものであるならば、調整運動自体が生における重要性へ目を誘う可能性が開け、この調整、運動が世界内における実現性を問題とするものである以上、ここには出会うということ自体の結晶化の実現へのベクトル性が一つの自然ないし自然的なものとして発生することになる。その意味では可能性としての結構にすぎないとはいえ、先に第二の自然と名付けたもの、これこそが本来の自然なのだが、その自然な動性は焦点を結ぶように構造化されていると述べることにすら決して不適切なことではないであろう。

もうひとつ、先に実現可能性について論じたが、これが私の大切さとの関連においてまさに価値に関わることに着目しておきたい。私の大切さとは、前に見たように、ただ私であるがゆえにという大切さというよりは、個的な場で活動するものとしての大切さである、もっと言えば、

自分は何ができるのか、何をしていくのかが問題にされる、そうした考慮の言わば対象としての、自分の、大切さである。そして先にも論じたように、私とは何かをやってきていて何かに出会っている私であり、何かが出会われてくること、世界に凹凸があること、こうしたことをのぞいては私にとっての私の大切さといったことも考えられない。統持が生の全体性にとってきわめて重要であり、そして先に見たように各種の実現可能性の場が開かれることにおいて出会いということも問題になるならば、統持の生成が可能な場が成立していることと、価値との間に不可分の関係性があることになる。つまり、実現、実行可能性、ないしは実現の世界内性、出会われるものと私自身の重要性、価値、何が重要かが私の能動性において問題になること、出会うということ自体の重要性、これらは緊密に連繫しているのである。そうした連動の場こそが、統持の生成可能性が開かれる場、そのことへの視の可能性が開かれる場なのである。

二つの節にかけて、出会いと、価値ないしは大切さと、統持との相互関係を考察してきた。これらの成果を取りまとめたうえで、統持の位置づけ、統持と通常の出会いとの関係、類縁性、相違をはっきりさせたい。

「価値の生成」においてももののとらえられ方、感得のされ方は、私自身の生の重みや私自身の営為性などの感得のされ方と相互連動した微妙で複雑な展開発展を遂げることが示された。これらの間の関係は、出会いに重要性がなければ統持に重要性などあり得ないのではないかといった批判が想定していたよりもはるかに繊細で相互的な関係である。こうした関係の輻湊性があるからこそ、統持がそうした場の中に位置づけられるのであり、また逆に言えば、統持が生の重さにとって重要であるような生だからこそ、そうした微妙な関係があることも当然と言えるわけである。

このことの一つの成果として、愛、価値、partiality といったこと、そして特にその相互連関を解明するための一つの糸口ないしは基盤が確保されたことがあげられる。この節の考察をふりかえる限りでは、何か出会われるものおよびそれに対する感得の、感情を含む適合（調整）と、自身の生全体の重みとの関係は極めて重要である以上、愛と価値とはその相互連関の観点からとらえられる必要性がかなりあるように思える。さらに言えば、統持ないしは統持的なものの展開可能性もが、そうした関係の考察のためには視野に収められねばならないように思える。これが単に一つの局面にすぎないものではないような重要性をもつことを、第七章以降で解明したいと思う。そして、この成果により、他性、受動性と能動性が、さまざまにかかわり交叉する場、統持の生成にもつながり得る場が、生全体の重みにかかわるものとして幅広い現象性において展開されている様が描かれたことにもなる。これを足掛かりとして本章の論自体にとってより重要なことに焦点を当てよう。

この二節の考察を通じて統持はその生成可能性において出会いの重みそのものの成立に関わること、通常の出会いと間に連続性を持つこと、すなわち、生の全般に関わるある種の一般性をもつことが明らかになった。統持は価値の生成の場という生にとってきわめて一般的な場に置かれているのである。そして本節の考察は、それが単に構造上の配置である以上に、そのこと自体への視が一般的な出会いの側から（構造上、可能性上ではあっても）当事者的にひらかれる場に置かれていることを示した。統持は生の中において実態的にも決して特殊な局面のみにかかわるものではない。

非特殊性という点では、統持と通常の出会いとの特質上の連続性として先に問題にされたことは重要性をもつ。ここまでの成果を振り返れば通常の出会いにも統持的なものの萌芽が含まれていることになるが、こ

の事情をやや単純化してさきに次のように言い表すこともできる。

- - 出会いにおいて、ものに私は自分から人生を実感する。ある程度でも生を全体として感得することをものの感得と連動させる。私はそのさい私の生が限定されたものであることを実感させられざるを得ない。このことは私の生の様々な（他の）限界を実感させることに道をひらき、それは生の問題性のより全体的な感得へ連なることに道をひらき、それはまた、それを自分が主題化することの必要性への目を開くことに道をひらき、それはまたそれを、様々な偶然性、限定性の構造による、ものとの出会いの問題性自体に連結させることへ道をひらく。- - 態度の取り直しが累乗化による深化と関連を持つものである以上、こうした連続性は自然なものである。少なくとも多くの出会いにはある程度の統持的なものが含まれていることになる。

こうした実情を考えると、統持とそれ以外の出会いの形態を明確に区別することは不可能であることを認めることがむしろ正当であるように思える。様々なものが統持と連続性だけではなく言わばそれへの展開傾向とでも言うべきものをもっている。そして統持の方すらも蒸発を秘めたものであることは論じてきたとおりであり、この蒸発は統持の範囲内での動性である以上に、解消転落破綻の可能性の基盤である以上、その意味で統持自体の側にも連続性の傾向が秘められていることになる。

- - 本論はこうした連続性、連動性を否定するのではなくむしろ、それが統持の独特性と両立するものとして積極的価値を持つことを主張したい。

統持と通常の出会いとの相違は前節においてもしばしば散発的に言及されてきたが、その全体像をとりまとめれば次のように整理できる。違いは自分の側で生の問題を（あらかじめ）どこまで全体として明示的に主題化するか、の能動性、自覚性（統持では盲目性への視がはたらくので、

単純な盲目性はない)の有無にある。これらが統持形成において決定的であることは第21、22節において扱った。また前節でもあらかじめの態度とりの必要性を指摘しておいた。構えの能動性、自覚性がある、生きること、出会うことがそれとしての問題性の相において主題化された形で現象する。明確な主題化はまた哲学的思考の命でもある。現実態の哲学は生の中にあるこうした思考の結実化をもくろんでいる。――それでも、同時にこの相違の叙述は相違が程度問題にすぎないことをよけいに印象付けるようなものであることも認めざるを得ないように思われる。我々はたいていの場合において主題的とも非主題的とも言えない態度でものごとに接している。しかも世界の様々な事象連関の中で、世界(世間)の中で生きることのうちににおいてそれがなされる以上、その境はあいまいにならざるを得ない。そして、統持の形成において能動性と受動性、肯定性と否定性の間に高度な輻湊性があっても、より原初的な形の輻湊性は様々な場面にあり、その不透明性、不可測性は様々な展開複雑化の可能性への動向をはらむ。

しかし、統持とその他のものの区別がこのような揺らぐことは積極的な意味を持ち得る。統持は決して特殊なものではなく、このことはむしろ、統持による過ちの転化が決して特殊な局面のものにすぎないのではないことを一層保証する。そして統持を言えば様々な局面に満ちている運動性としてとらえる見方も可能になるように思える。様々な出会い、そして、様々な形で価値が問題になる局面が統持に連なる連続性を持ち、そして様々な出会いに統持への発展の傾向性が懐胎されている。

この、統持をある種の運動性としてとらえる見方をこの後、とりわけ第32節以降においてさらに積極的に展開していきたい。ここでは、この運動性を哲学と一体化したものとしてとらえらるゝとらえ方が一定の説得力をもつものであることを提起しておきたい。統持と通常の出会いの区別

が流動化しているが、この提起は区別にある種の重要性があると主張することと結び付き、統持の独自性が、連続性、連動性と両立するという主張と連関している。その提起を区別の面を主にする形で述べると次のようになる。――自覚性、出会うこと自体の主題化に統持と他との区別を主張することは、区別についての事実的主張という以上に言わば規範的意味を持つ。能動性、主題化はそれとして重要であり、それを先鋭化させることが、先鋭化させた形で生を感得することであり味わうことでもあり得る。もっと言えば、主題化自体がそれを引き起こす、ないしは強化、先鋭化することであり得る。この傾向は我々の生の中にもともと含まれている。哲学はその結実である。これは哲学についての突飛な主張でもないし、この段階での突然の主張でもない。というのも本論は哲学の言語行為的性格をすでに以前に指摘したのであり、それがここでも重要性をもつことになるからである。哲学は世界をガラス越しに見るのではなく、世界のあり方に介入する。もちろんそれは世界のあり方から独立した力による介入ではなく、世界の中に懐胎される力の結実による介入である。――統持は決してあいまいな区別に基づいて仮構されたものではない。むしろ世界の中におきるある種の運動性としてとらえることができるものである。それは哲学とともにある運動、いまここで展開されている哲学とともにある運動なのである。

先に述べたように、このことの意味を（主に第32節以降で）さらに展開し、論点自体の説得力を補強していかなければならない。

29 小文字と大文字 大文字的なものの物語

第29～31節では、統持の変転転落可能性の問題を統持の小文字性の名の下に扱う。

蒸発結晶化の対成立が主題化されたとはいえ、肯定性の変遷可能性や

現実的変遷の問題について十分展開されているとはいえない。もっと言えば、統持とは所詮はものにすぎないという問題である。そのようなものを生の支柱としようということは幼稚な幻想にすぎないのではなかろうか。適合が調整されるとしても常に齟齬の可能性につきまといわれ、具体的な破局の可能性につきまといわれている。特にこの最後のことが生きることによって大きな損失であることは自明である。(大切な近しい人の死後、多くの場合に人間が回復し立ち直るというデータがあり、確かにそこには大きな真実があるが、それは真実の一面にすぎない。)

統持はあまりにも小文字的でありすぎるのだ。私が生の安定、統一性を希求するということは事実として認めねばならない。我々がより大文字的なものを追求するのは当然ではなかろうか。

第29～31節はこの問題に回答を与えることにより、転の提起の内実をより明らかにすることをもくろむ。論を次のように進行させる。まず第29節において一種の物語のようなものを提示する。そのような物語をすることの意味と、その他の疑念への釈明を先送りし、小文字の大文字化の、そして大文字的なものの没落の物語を描く。第30節で物語についてのいくつかの補足的説明を加えてから、第31節で物語を叙述することの意味を明らかにし、それを通じて物語の筋道自体の説得力をも補強し、物語が生の実態に対応するものであって、決して単なる物語や思想のようなものではないことを明らかにする。

物語は、次のようなものである。

統持が問題になる限りにおいては、出会うということ自体の世界での現実的問題化とそれに対する現実的实践が問題になる。この統持というものの、統持で問題になっている出会いというものの性格上、この現実性が欠如することは問題になる事柄自体を無意味化してしまう。大文字的なものでも世界での現出性、ないしは現出との現実的関連性を欠いた全

く超越的なものは、統持の大文字化としては失効する。

大文字自体がどのようなものであり得るか、大文字自体と大文字的なものとのような関係にあるのかの(おそらく考えてもしかたのない)問題は措いておく。上の条件を備えたもので、小文字性をなるべく削ぎ落としたもの、変転性を削ぎ落とし、何らかの理念性と安定性をそなえた大文字的なもの、大文字性を備えた現象的姿はあり得ないであろうか。あり得るように思える。考えられるものとして三つを挙げたい。言葉と、宗教団体などの組織と、人間の生に向かう、立ち向かうあり方や営為の継承(「行持」と名付けておこう)である。それぞれについての説明を簡単に加えておこう。

第一。言葉については第三章第10節で、すでに取り上げた出会いの大切さを語る言葉、統持的な言葉、我々がこの世界に問題を俯瞰する目を持ちつつそれを具体的なものとのかわりにおいて感得実現化することの動性を促す、あるいはそれを象徴する言葉である。その論をここでは繰り返さない。統持の蒸発の考察をもって、その言葉もこれまでの蒸発等の考察に示された生の実感、深みを反映するようなものでなければならぬことになる。

第二。組織は理念を反映し得る。理念は統持的なものの重みについての理念であり得る。実際には組織でそのような理念を反映したものはあまりないと思えるかもしれないが、前にも論じたように例えばある種の宗教は人間の平凡さを極めること、自分が自分であることを極めることに核心を持つと考えることができる。それはこの世界で、個別的にあること、その具体性の先鋭化の必要性和連結し得るものであるだけに、統持とそうした理念とは連動する。理念にはその性格上抽象性の危険が付きまとうが、この世界にある何らかの具体的な姿を取ることが、大文字的なものの実現化の現象性を支え得る。そして人間の組織としての具体

性、その営為の具体性は場合によっては大文字的なものの世界内的顕現を、世界内的な具体性として支え得るであろう。

第三。世界の問題、様々な齟齬、偶然性を秘めた相としてのそれに向き合う人間の姿が感得されること、これは具体的な姿として感得されることで実効性を持つが、その方途として自然に考えられるものとして、ある程度具体的な人間の営為を思い浮かべることがある。こうした営為が具体的に脈々と続いていることを実感することは、具体性とともにその事柄の力を感得させる。こうした相伝の思い描き、行の連脈とした続きの末端に自分が位置していることを思い描くことは、自己アイデンティティーの物語作りとして、また自己理解の便宜のために有益なだけなのではない。我々の営為は具体的な営為でなければならないが、理念が世界に実現されるべきであり、また、されていることの世界性はこのような形で（おそらくは最も有効に）思い描かれるであろう。なお、この相伝性は第二のもの、宗教的団体のあり方と連動し得るのであり、実際に宗教団体の多くにおいてそうした相伝は宗教団体をそれとして成立させるためのかなり重要な要因となっている。

第30節で考察し直すが、我々の生の中には大文字的なものの萌芽、統持的なものはかなさに対応してそれを安定させていくような運動の萌芽的なものがかなりちりばめられている。我々はそれなりに理念やそれを言葉化したフレーズに依拠して生きているし、第三の行持にある程度類似した自己物語を思い描いて生きている。先に我々の生の実際のものごと、人との関係の中には統持的なものの萌芽が様々な形でちりばめられていることを確認したが、そうした小文字的なものといま述べた大文字的なものが我々の生には満ちている。個別的なものの持つ不安定性とその一方で具体性の鋭さ、そこにおける生の実感の高まりの素地となる力、それと大文字的なものの安定性、こうしたものの間で多くの人間は

バランスをとって生きているという言い方が出来る。このようなバランスの中で生を実感し生きがいを感じることは自体に特に問題はないであろう。たしかに我々はバランスをとって生きねばならない。それが何かの忘却と結び付くにしても、何回か確認した通り、我々が忘却の場にいることは避けられない。――それでも我々が接する小文字的なものはそうしたバランスを突き崩す力をもっている。大文字的なもののある種の崩壊がどうしても描かれることになる。

もともとここで言う大文字的なものが小文字的統持の理念の体現化であり、統持というものが小文字的なものの偶然性自体の結晶である以上、大文字的なものもその力の源泉を小文字の力のうちに持っている。だからもともと大文字的なもの（の現象態）はそれ自体のうちにひび割れを抱え込んでいる。（それでは最初から結果の分かっている茶番劇ではないかという抗議に対しては後で答える。）理念が理念として機能するためには思考の時間を必要とするが、それはバランスの中のアンバランスの時間帯であり、思考は理念の根源に差し向け小文字的なもののその鋭さをかえって顕在化させてしまう可能性を拓く。いずれにしても、何かを実現しようとするにせよそうでないにせよ、我々は個々のものに関わりながら生きる。だから組織において理念を実現する運動をする際にも、その実現実行が小文字においてでしかなされないというだけではなく、それとは関係ない局面においても「ことはおきる」。何らかの全体的理念的なものを先において個々の場での適用を考えるという一方的な仕方で行くように生は出来ていない。大文字的なものを先において小文字的なものをその適用例とするわけにはいかない。それぞれの場が我々を決める力を一定程度ではあっても持つ。それぞれの場に、ものに、能動的にかかわるということがあってはじめて生が開かれる。

かくして、小文字的なものが「再び」力を持つ。結局は小文字が力を

持つがゆえの大文字である。教会的組織は小文字的なものの力と大文字性の間を揺れ動く。言葉は十分な相続力を持たない。歴史は私の理解の具体性のうちにはじめて意味を持つ。――言葉については第三章第10節で、言葉への累乗化が人、ものへのそのヴァリエーションとしてのみ力を持つことを論じたので、ここでは他の二つについて簡単にまとめておく。

宗教団体などの組織は世間的な事情状況に左右される。そこでの営為は、理念実現のための世界内の事情に従った秩序のもとに配され、他者や様々なものの偶然性の感得との色調と齟齬をきたす。理念実現のために現実的世間的なものごとに関わらねばならないそのリズムが我々を規定する。さらに計画規格の場は一般性が支配する場である。基本的にそこでは一般的原則の個別への適用が問題になる。大文字的なものはその本来の理念内容の効力を弱めた色褪せたものになってしまう可能性にさらされる。一方で先に述べたように、小文字的なものは力をもつ。活動の様々な局面で「ことはおきる」。かくしてそうした小文字的なものの感得と大文字的理念にもとづいた行動秩序の均衡状態と、理念の色褪せと、小文字的なものの力の顕現化、これらの間での揺れ動き、不安定化がもたらされることになり、こうした中途半端さの中で大文字的なものを中心とした秩序構造は没落の動向にさらされることになる。

行の伝統的つながりは、それ自体では現実の活動性を十分に持たない。相伝はもちろん人、一対一等の具体的なものであり得るが、それは教会組織に置かれるならばある一定の理念や教義が支配的になる場で行われ、前段落で論じたような問題にまきこまれることになるし、それ以外の場合では（特に個人的に相伝が「想像されるだけ」ならば）生の規定力や具体的な形で現実的に規定する時間枠はかなり限定されたものになる。そして生の理念と関係をもつことで生の力動性と現実に関わるにし

ても、目的実現の行動形態をとる以外になく、その場合は（やはりまた先に論じたような形で）企画性の忘却の場への突入を強めてしまうのである⁽⁸⁾。

注

- 1 死がなければ限定がないというわけではないことは、考察した通りである。
- 2 愛と感情情動との関係についての（私が見た限りでの）最も優れた研究としては Helm B. 2010 *Love, Friendship, and the Self*. なお、愛についての学界の近年の研究動向の概括としては同書と同じ著者の Stanford Encyclopedia の記事（Love の項目）および Kolodny, N., 2003, “Love as Valuing a Relationship”, *The Philosophical Review*, 112:135–89.（特に 1 番目と 3 番目のもの）が有益である。なお、emotion は日本の哲学文献では「感情」と訳されることが少なくないようであるが（哲学史の文献では「情動」が一般的と思うが）、この訳語についての判断はペンディングにしておかせていただきたい。
- 3 近年の学界では「恋」にあたるものは love のうちの周縁的なものとしてしか扱われていない。なお、「若年」で主にティーンエイジャーのことを考えている。また異性愛に限定するのは、社会的規範圧力の問題性と意義を主題化するための便宜上の都合による。
- 4 五の夢幻性の問題については、先に幽霊性として言及したことは、夢幻性と現実性との相即を表しているが、夢幻性のその他の点と合わせて後でまとめる。
- 5 partiality 問題について今のところ最もまとまったモノグラフとしては S. Keller *Partiality* 2013. この問題についての提題者の一人としてコッティンガムの名を挙げることができるが、それ以上にウィリアムズやネーゲルの仕事を受け継いだ若手研究者の間で活発な研究がなされていると言える。なお、partiality 問題と愛の問題の関係についての一つの有益な見方を提示したものとして T. Jollimore *Love's Vision* 2011 がある。
- 6 価値の实在論と本論の立場との関係の問題についてはペンディングにする。
- 7 欲求の場合でも例えば「生というものはそうした欲求によって充実するものなのだ」というような理解がなければならない。
- 8 もっともこうした問題は上の二つに比べるとやや技術的レベルのものであるように私には思える。行持の積極的意義については後の章で追及し直される必要があるように思われる。